西真寺通信

令和七年春号　発行　西真寺

●無声の死について

無声の死とは、社会から取り残された、数字にしか表れない死を指します。例えば、出生前診断（注1）によって堕胎された赤ちゃん、戦争紛争地によって失われた名もなき民間人、ユダヤ人虐殺の前に行われたナチスによる精神疾患者の安楽死（Ｔ４作戦：注2）、相模原殺傷事件で殺された知的障がい者の匿名の人々（注3）、優生保護法で堕胎された赤ちゃん等、多岐に渡ります。声なき声、抹殺された声を無声の死と言い、排除された死、見えない死のことを示します。

一方、有声の死かつ優生の死に至る人類の主流は、スマホという方位磁石を使い、便利な船に乗って順風満帆かのようです。辿り着く港には、どんな世界が待っているのでしょうか。利便性という波の勢いは止められないですし、乗船前である元の生活を送ることもできません。とすれば、脳のAI化もデザイナーベイビー（遺伝子操作した子）も、そして、人間のクローン化も同じ科学的到達度、寄港の一つに過ぎません。しかし人類は、航海の波に飲まれ、その希望的航海の夢から目覚め、気が付けば既に後戻りできない氷山に座礁しています。私たち人類は、優生思想の失敗から何を学び、何を反省したのでしょうか。私たちは、利便性と功名の波に飲まれ、自己の居場所さえ分からなくなっている難破船なのです。

映画「ガタカ」に見られるような適正者とそうではない不適正者の二分化は、フィクションでは収まらない程、現実における二分の構築化として進んでいます。なぜなら、既に出生前診断による産み分けによって、準備ができるからです。小説、映画、ドラマで描かれたカズオ・イシグロの「私を離さないで」のように人類は自らクローンを造り、その合理性に沿った欲を満たすのです。そして、クローンとオリジナルの間に壁を造ります。そして、クローンは、人間として認められず、人間として生きることを封印する世界で生き、オリジナルの為に臓器を提供して無声の死を遂げることになります。

クローンは、３回臓器移植したら、その世界からも追放され抹殺されるのです。私たちは、もう一人の自分の死の影におびえて生きることが想像できない程、ぬくもりのない人間らしからぬ生き方にその生涯を費やすことになります。この虚しさや絶望という感情さえも抱けない数値化されたまま、たちは生き続けるのです。私たちは本当にその世界を望んでいるのでしょうか。

もし、「ガタカ」や「私を離さないで」の世界がフィクションでなく、リアリティのある世界だったら、人間は生きることに意味を見つけられなくなると思います。限られたいのちだからこそ価値があるにも拘らず。唯一自分だけの人生を生きられることを自ら放棄したのだから、その世界への帰結に矛盾は無いのでしょう。自我が肥大化して、既に他者に対する想像力の欠けた世界観しか生まれない二分による帰結は、今の自分たちが本当に望んでいた世界の具現化になるのです。

これ以上、無声の死を増やしても、その声なき声を聴く能力さえない人類に救いはあるのでしょうか。亡くなった親や先祖の声なき声を無声の死にする生き方に未来はあるのでしょうか。私たちは立ち止まり、自分は限られた時間の中で何をしたいのか問い続けなければ、生まれてきた意味さえ分からなくなります。「あなたに会うために私は生まれてきたのです」と言える、縁のある世界を私は望みます。そして、限られた時間の中で、つながり合う人と生の喜びを分かちあえる世界にしたいです。そのままの自分に満足できる生き方を私はただ望むだけなのです。

映画「ガタカ」と「私を離さないで」のあらすじ

●「ガタカ」

遺伝子操作による出産がポピュラーとなった近未来では、自然出産で生まれた子供は「神の子」と言われ、さまざまな差別による理不尽な人生を強いられています。主人公であるヴィンセントも神の子です。

ヴィンセントの夢は宇宙飛行士になることですが、この職業には遺伝子操作で生まれた「適正者」しか就くことができません。未来の科学は、差別を生む装置として機能しているのです。

そこで彼は、「適正者」になりすます」とで宇宙局ガタカに侵入しました。その他者とは、事故で足の自由を失った「適正者」ジェロームでした。

並大抵ならぬ努力や他者の協力により、ヴィンセントは憧れの宇宙へ飛び立ちますが、ジェロームは自ら命を絶ってしまいます。

●「私を離さないで」

主人公のキャシーは、三十一歳の優秀な介護人です。介護人と言っても、彼女が担当するのは、臓器提供者のクローン人間です。キャシーもまたクローン人間であり、将来は夢も希望もないオリジナルに臓器提供をするだけで生涯を終えます。

クローン人間である彼らは、ヘールシャムという施設で幼少時代から思春期を集団で過ごし、十代後半で施設を出てコテージで生活をして、自分の臓器を移植する日を待ちます。

彼らは抗うことなく臓器提供を受け容れ、自分たちの目的を果たして死んでいきます。親友のルーシーとトミー。ごく普通の若者たちの友情と恋愛を描いているだけなのにあまりにも重く、切なさが胸に突き刺さる問題作であり、名作です。

原作は日本生まれのイギリス育ちのカズオ・イシグロ。２０１７年ノーベル文学賞受賞。この作品は、イギリスの最高名誉に当たるブッカー賞を受賞しています。

●ドイツの「つまずきの石」と仏壇

ドイツの芸術家であるグンダー・デムニヒさんが、１９９２年に始めたナチスによる迫害者・犠牲者一人ひとりの氏名・生年月日などを刻んだ真鍮版を、その人が生前住んでいた場所の道路に、歩行者に見えるように埋め込む取り組みです。

これには、つまずきの石によって歩行者を精神的に「つまずかせ(気づかせ)」、碑文に何が書いてあるのかを読むために「かがんで頭を下げる」必要がある状況をつくり、犠牲の存在に気づき敬意を払うよう促す狙いがあります。また、「つまずきの石」は、一つの石に複数名の名前や犠牲者を書くことも、石を大量に積み上げることもせず、一人につきひとつの石を準備し、道に埋めるのです。

当時の残虐な大量虐殺に対する否定として、(「〇万人」という数字ではなく)一人ひとりの犠牲者を思い起こさせることをコンセプトにしています。

私たちが、普段頭を下げるときは、何かをお願いするときが多いかもしれません。神社に行っておみくじをして、手を合わせて自分の思い通りにしてくださいという願掛けなどが、それです。そこに気づきや成長はあるでしょうか。おそらく、気持ちの上では、その時だけ、すっきりするかもしれませんが、敬意と気づきはあるのでしょうか。亡くなった人たちは、そんな姿を生きている人たちに期待する訳ではないと思います。亡くなった人たちの願いに耳を傾ける機会とは、無縁の行いだからです。

仏壇やお墓の前で頭を下げる行いは、どうでしょうか。亡くなった両親に申し訳ないと思う時、見守ってくれたおかげで、今こうしてあると報告できた時、自然に頭が下がるのです。そこには、過去帳に記された自分のいのちをつないでくれた数えきれないほどの仏様が存在します。そこには、敬意と気づきが含まれ、仏様もその姿を見て喜んでいることでしょう。

●いのちは誰のものですか？

スイス人の知り合いで、日本在住の僧侶ジェシーさんの母親が、合法的に安楽死を選択しました。ジェシーさんは、どうしても母親の死を受け容れることができない状態で苦しんだそうです。さらにジェシーさんを苦しめたのは、安楽死を選んだ理由にありました。ジェシーさんの母親は、重篤な病気を抱えていなかったのです。ただ老いたくないから死を選び、「このまま老いて他人に面倒をかけてまで生きたくない」、「死は私の権利です」と言って亡くなったそうです。この母親の死生観と日本の若者の死んで楽になるとする死に対する「希求と美化」とは類似しています。それぞれがかっこよく、かっこいいまま死にたいという願望があるのではないでしょうか。

しかし、いのちとは、生物学的な生命のみならず、所有するものでもなく、自分だけのものではない「はたらき」そのものです。安楽死を選んだジェシーさんの母親のいのちとは、誰のものだろうか。いのちは誰のものでもないはずです。そして、いのちを所有し、執着することで結果的にジェシーさんの心を苦しめ、傷つけていること自体、果たして母親が本当に望んでいた事であったのだろうかと考えてしまいます。ジェシーさんの母親は、日本に移住していたジェシーさんに何を伝えたかったのか。自分が死んだ後の想像力は無かったのかと考えてしまうのです。ここに日本の死生観に触れたジェシーさんとヨーロッパ在住の母親の死生観における違いが明らかになると思います。

ヨーロッパと日本における死生観の違いはどこにあるのでしょうか。郷堀ヨゼフ（淑徳大学教授）によれば、死者との関係を顕密に保ってきた日本社会に驚き、「死者も生きている人と同様に人間関係のネットワークに入れる価値観を、ヨーロッパで生まれ育った私は想像できなかった」と述べています。

同じ土地で生まれ育った親子でも、互いに死生観は異なったまま死んで往くのです。生き死にを決まり事にする程、単純に解決できない、量り知ることのできない問題なのであると私は思います。

キリスト教では、神様が人間のいのちを創造したと教えられ、個人主義が成立しています。人間はアダムとイブによる創造物です。体は物体に過ぎず、神が魂を吹き込んで生命が誕生するという考えです。ですから、先祖代々から伝わるいのちとは考えませんし、縁やつながりを重視してきているわけではないのです。

我々は個別に生まれていますが、つながり合ういのちを生きていることに間違いはありません。すなわち、量ることのできない「はたらき」で生かされているのです。だからこそ、いのちほど尊いものは無いのだと知らされるのである、と私は考えます。

参考資料

郷堀ヨゼフ【日本型の死生観】
2024.10.13 読売新聞 12 版
勝山逸雄さん提供資料

（注1）出生前診断（新型出生前診断）

以前から、羊水検査や絨毛検査などで、ダウン症の染色体異常による確定診断を知る為の検査がありました。しかし、羊水検査は、妊娠15～16週以降に妊婦のお腹に注射針を刺して20ミリの羊水を抜いて検査する為、流産のリスクがあり、敬遠される方が大半でした。検査結果の確実性は高いのですが、施行可能の時期が限定されることも、ためらう方が多く存在していた理由です。

しかし、新型の出生前診断は、非確定検査ではありますが、血液検査だけで済み、限定された遺伝子異常による障がいの有無がある程度分かるようになりました。この手軽さと、障がい者は生まれながらにして不幸であるという認識から、約9割の方々が生まない選択をしています。

新出生前診断とは、健康な子どもを生む為の検査なのか、障がいの子を産まない選択をする権利

なのか。自分たちの理想通り思い通りの子どもを生む為の選択肢の為なのか、という議論が必要な診断なのです。**「障がいを持って生まれるのはかわいそう」という思いやりで、自分の子どもを結果的に排除してしまう。**その傾向が強く反映している事象です。障がいを持っている子どもが生きていける環境をつくることが社会の義務であり、このような切り捨てる社会を生むことが義務ではないと私は思います。

社会は私たちが創るものであり、「障がい者は生まれながらに不幸である」という価値観を創ってきたのは私たちなのです。私たちが障がい者を排除してきた社会を認めながら放置してきたのです。つまり、この問題は、私たちの問題であり、義務でもあり、いつ当事者になってもおかしくは無いのです。今は元気でも、いつ車いすの生活がはじまるかは確定されていないのが事実です。いつでも事実に対応でき、かつ事実に対する自らの価値観を少なからず構築する必要性を感じています。

（注2）T4作戦

T4作戦とは、1930年代のドイツで行われた、精神疾患者や障がい者を対象にした「強制された安楽死」です。ナチスによる、ユダヤ人大量虐殺「ホロコースト」は世界的に有名ですが、「ホロコースト」の前に行われたT4作戦が「ホロコースト」につながったと言われる程の世界的な悲劇でした。数で表現すると約40万人以上の人間が排除された悲劇です。

その悲劇が、映画「ガタカ」と似ているのは、「適者生存の法則」です。この考えは、ダーウィンの法則を基にした考えから生まれたもので、優秀な者だけが生き残り、弱者は滅びるという「内なる優生思想」によるものです。そして、国が戦争に向かえば、その「内なる優生思想」は活性化し、弱者は必要なくなる存在になります。

その判断をしたのは、医師であり、科学者の判断でした。相模原で殺された知的障がい者に対する犯人と同じ理由で、40万人以上の人々が殺されたのです。

「障がいがあるから、私たちは殺されてもいい存在なんですか？」無声の声は、私の体の中で響きます。いのちが共鳴しなくなったとき、戦争は起こるべきして起こるのです。「国家（社会）による障がい者への扱いは、戦争に対するバロメーターである」と言った、海老原宏美さんの言葉はとても重く、私の内なる世界で響き続けます。

（注3）相模原殺傷事件で殺された知的障がい者の匿名の人々

神奈川県立の施設「津久井やまゆり園」の元職員、植松聖（当時26歳）が、入所者19人を刺殺、職員を含め26人に重軽傷を負わせた事件が2016年にありました。遺族は、被害者の実名を公表していません。障がい者に対する差別と偏見がある社会では、無声の声のみならず名前すら声に出すことが出来ない実情があるのです。**社会が変われば、障がい者は障害者でなくなるし、迷惑をかける存在ではなくなるはず**です。人の価値とは、私たちが決めることなので

●編集後記

今年一年大変お世話になりました。来年もよろしくお願いします。今年一年を振り返ると、一番印象に残っていることは、長男の僧侶としての第一歩が踏み出され、坊守と共に得度研修を経て、試験に合格したことが上げられます。

坊守は、通信教育中、コロナの3年間は、実習試験が出来ず、5年かかり得度研修を受けることが出来ました。来年の2月に得度の習礼が終われば、正式に僧侶の資格がもらえます。長男の望は、一年間の留学から帰国して、夏休み中二か月間、毎日お経と仏教学の教化を経て、得度試験に合格しました。来年は就職活動になる為、内定を頂いた時点で剃髪して、得度習礼に本山に行く予定です。2人とも、僧侶としての資格だけで、住職になるには、さらにまた受験と修行をパスしなければなりません。私がいつ死んでも大丈夫な寺院体制は築くつもりでおりますので、ひとまずはご安心ください。

南無阿弥陀仏